

動物との暮らし その1

両親と5人の子供たちの暮らしには、沢山の動物も家畜として飼われていた。ヤギが1匹、緬羊が2匹、豚5匹、ニワトリ10羽、おまけに猫1匹、いつもこれぐらいの動物はいたようだ。田んぼの代掻きの頃だけ、牛が1頭いることもあったという。これだけの動物がいるのだから、その餌の準備も日々の仕事。病気を患う両親がその仕事をこなすことは出来ず、これもまた子供たちの仕事だった。

朝になると動物たちが餌を待っている。サキノも朝から大忙しだった。物心ついた頃には“ソラックチ（大きな背負い籠）”を背負って鎌を持って、姉たちに教えられた場所に行く。そこでせっせと草を刈って持ち帰り、それぞれの動物たちに食べさせる毎日だった。最初は姉たちと一緒にだったが、そのうち一人でも行けるようになると、草の成長を考えながら今日はあそこ、明日はあそこと計画を立てられるようになってきた。小学校に行くようになると、それが登校前の日課だった。腹ぺこな動物たちを放って学校に行く、そんな可哀そうなことは出来ない。でも餌やりが終わらないと学校には行けない。サキノは一人、子供ながらに小さな脳をフル稼働していたのだろう。最も効率的な方法で、朝の仕事を終えていたようだ。

豚と猫だけ残飯だったが、それ以外はだいたい草が餌だった。でも時々ニワトリには、タニシの殻をつぶして中身と一緒に草に混ぜたものや、トウモロコシを干してそれを煮て潰したものなどを餌としたこともあった。また、動物のフンの始末もやらなくてはならない。毎日ではないが、豚小屋の藁が汚れたらフンを集めて肥やし袋に入れて家の田んぼや畑に撒く。豚のフンは必ず、大切に用立てなくてはならなかった。

糞に纏わる最も嫌だった仕事がある。毎年8月の暑い時が“ソバ代（しろ）うない”の頃で、その時に必ずやらされたこと。それは、家の肥溜めの人糞を集めたものを、糶に振って混ぜるという仕事だった。それを必ず素手でやらなくてはならなかったというのだ。なんでもそれが一番いい土になる、そう親から言われれば、言われた通りにやるしかない。「真夏のムンムンどって暑いさなかだもの、まあものすごい臭いなぞ。それを何でかんで素手で混ぜろよって言われてな。これは切なかったなあ。毎年その節になっと、ああやだなあ～って思うもんだっけ。」

聞きながらも、これは大人だって辛くてたまらない。ましてや子供だもの、どんなに辛かっただろう。と、いたいけな少女の姿を想像して聞いていたのだが…。

でも本人、「そういえば、そんなこともやらされてたっけな。なんだ。」と、たまたま何かの拍子に思い出した程度で、さほど重い記憶ではなさそうだ。辛かったようではあるが、忘れていたほどのもの。

いやはや、相も変わらず別な意味で驚かされてしまう。

家の前には堰があって、動物に与える飲み水には困らなかった。そして家の中には井戸もあったから、自分たちの飲み水にも困らなかった。「本名ってところは水はふんだんにあったなあ。あちこち堰が通ってて、いつもゴンゴン水の流れた。おら家は井戸まであったからそれは有難かったのや。」前に堰があったお陰で、動物たちの体を洗うのもすぐそこで洗うことが出来た。

こうした動物たちと暮らす日々は、サキノが高校の頃まで続いていた。当時の村々の動物は、家畜であって、決してペットではなかった。猫でさえ、ネズミを捕ってもらった為の存在だった。この小さな村々に、動物がペットとして現れたのがいつ頃なのだろう。動物が家計の助けではなく、こころの癒しになりえたのは…